

専門家に聞きました

これから私たちはどのようにデジタル機器やICT (Information and Communication Technology:情報通信技術)と向き合っていけばよいのでしょうか。メディアリテラシーが専門で、デジタル・シティズンシップに関する著書もある法政大学の坂本旬教授にうかがいました。

Q 「インターネット上の情報には本当でないものがある」とよく言われますが、本当かどうかを見分けるにはどうしたらいいのですか？



A 「情報の真偽を見分ける」ことはなかなか難しいのですが、「信頼できる情報か否か」は判定できます。まず情報源を確認しましょう。サイトの信頼性を調べることも必要です。「意見」と「事実に関する記述」を分けて考える訓練も必要です。

情報に対して、常に以下の「さ・ぎ・し・か・な」を考える習慣をつけるとよいかもかもしれません。

- さ(作者):誰がメッセージを作り出したのか
- ぎ(技法):私たちの注意を引くためにどんな創造的表現技法が使われているか
- し(視聴者):他の視聴者は自分と比べてどのように違った理解をするだろうか
- か(価値観):どんな価値観やライフスタイル、視点が表現されているか、あるいは排除されているか
- な(なぜ):なぜメッセージが送られてきたのか

2016年にアメリカのスタンフォード大学が行った調査で、デジタルネイティブ世代はフェイクニュースを見分けることができない、という結果も出ており、こういった教育は重要だと考えています。この世代はニュースをマスメディア経由ではなく、SNSで見えています。またそのSNSのプラットフォームはどんどん移り変わっています。彼らはfacebookやTwitterは使いません。今はInstagramやTikTokでしょうか。TikTokを見ると陰謀論がたくさん出てきますが規制はされていません。見分けられる力が必要です。

Q 先生の著書に出てくる「アルゴリズム・リテラシー」とは何ですか？



A さまざまなソーシャルメディアにおいて、アクセス数に応じて広告収入を得る仕組みがありますし、検索エンジンではランキングシステムが稼働しています。これらを動かしているのがアルゴリズムで、ユーザーそれぞれの検索履歴やクリック履歴を分析し学習することで、表示される情報を取捨選択しています。このような仕組みを、まず知らなくてはなりません。

先のスタンフォード大学の調査では、中学生でもサイトに出てくる広告とニュース記事を見分けられないという結果が出ています。アルゴリズムによってフィルターバブル(ユーザーの見た情報だけが優先的に表示され、自身の考え方や価値観の泡の中で孤立する)現象も起こります。なぜその情報が出てくるのか、どういう影響があるか、どうすればその影響から抜け出せるかを考え、ディスカッションするとよいでしょう。

Q デジタル・シティズンシップは実は大人の問題でもある、とおっしゃっておられますが。



A その通りです。小学生のスマホの所持率は、自分専用の場合40.4%、親との共用を含めると68.5%(令和3年度内閣府調査)になりました。子どもたちはスマホを持った時点でSNSデビュー、インターネット上の公共空間に参加することになります。しかし、そこでの適切なふるまい方については、これまでほとんど教育がされてきていません。

オンライン上には誹謗中傷やヘイトスピーチ、フェイクニュースや陰謀論といった問題があり、フィルターバブルやデジタルデバイド(スマホの有無やスキルの差があって情報に平等にアクセスできないこと)の問題もあります。これは子どもだけに限った話ではなく、大人でも同じではないでしょうか。子どもも大人も、これまで以上にリテラシーを高めていくことが重要だと思います。

取材を通して、インターネットならではの、デジタルならではのさまざまな問題が本当にたくさんあり、フィルタリングや制限をかけるだけではもはや追いつかない、子どもたちが自分で考え、物事を見極められる力をつけていかないといけないのだ、と感じました。そのためには大人も学ばなければなりません。大きな宿題を出された気がします。



坂本旬 (さかもと・じゅん)
法政大学教授。東京都立大学大学院教育学専攻博士課程単位取得満期退学。専門はメディアリテラシーで大学では図書館司書課程も担当。総務省「ICT活用のためのリテラシー向上に関する検討会」委員。著書に『デジタル・シティズンシップ:コンピュータ1人1台時代の善き使い手をめざす学び』(大月書店、2020)など。



皆さまのご意見をお聞かせください。
mitakanomori.pr@gmail.com



学園サポーター登録はこちら



検定サポーター登録はこちら



三鷹の森学園CS委員会だより

あすのつばさ 43号

令和5年3月
学園長:福島健明
会長:山田圭介
発行:三鷹の森学園
コミュニティ・スクール委員会

コミュニティ・スクールとは、「地域とともにある学校」を実現するための仕組みです。三鷹市では学園ごとにCS(コミュニティ・スクール)委員会が設置されており、保護者や地域住民がCS委員として、よりよい学校づくりのために知恵を出し合っています。

三鷹の森学園HP▶



7月11日 三鷹の森学園 児童生徒会交流会

@第三中学校 五小・高山小6年生代表委員13名、三中生徒会役員7名

- ①スマホ・SNSをすっきり終われるときと、だらだらと続けてしまうときの違いは何か?
- ②LINEやSNSで伝えやすいことは何か? 電話や対面で伝えやすいことは何か?
- ③インターネットで世界が広がったことは何か? そのことで心配なことは何か?
- ④インターネットが生活に役立つことは何か? インターネットに頼りすぎていることは何か?

についてグループ別に話し合いました。

●インターネットやSNSのメリット
直接会わなくてもいい
いつでもどこでもできる
調べものや買い物ができる
わかりやすい動画がある

●デメリット
誤解が生じやすい
本当かどうかわからない情報がある
個人情報が出てしまうと危険
目が悪くなる
匿名だからと書いてしまうことがある

等の意見が出ました。



8月23日 三鷹の森学園 「三鷹市デジタル・シティズンシップ指針」の策定に係る熟議

@第三中学校 五小・高山小6年生代表委員4名、三中生徒会役員3名、3校の校長先生、3校の先生各1名、CS委員3名

「リラックスする」「身近な人とつながる」「身につける(学習)」「社会とつながる」という4つの目的のために、スマホで「自分がふだんやっていること」と「こんなこともできるかも?というアイデア」を出し合い、皆で共有しました。

ファシリテーターの下田太一さん(NPO青少年メディア研究協会代表)から

「デジタル・シティズンシップの“シティズン” citizen=市民)とは、民主主義社会を構成する人のこと。皆で話し合って問題解決していくのがシティズン」

「条例等で規制するのではなく、皆で話し合って決めていくのがデジタル・シティズンシップ」
「インターネットやスマホは、使うことで幸せにならないといけない」

というお話がありました。



12月17日 全学園 三鷹市デジタル・シティズンシップに係る全学園での熟議

@三鷹市公会堂さんさん館 五小・高山小代表委員各2名、三中生徒会役員2名、3校の先生各1名、CS委員1名

市内全学園から代表の児童生徒、先生方、CS委員が集まり、

- ①デジタル機器の「娯楽:どのように終わらせるか」「生活」「学習」「社会」について、「良い点・悪い点」
- ②「行動宣言」に向けての意見

を出し合いました。

子どもたち→学園共通で「最後まで話を聞いて欲しい」「もっと任せてほしい」「良くない使い方をしたらきちんと叱ってほしい」という意見が出ました。三鷹の森では「知的好奇心を磨きたい」「真偽を見極める力を習得したい」「デジタル・アナログをうまく使えるようになりたい」「マナーを身に付けたい」「使い方を理解してほしい」などのリクエストがありました。

大人たち→「環境を整えてあげたい」「トラブルから守ってあげたい」「有意義な使い方をしたい」という意見が出ていました。

この熟議を踏まえて、各学園で「行動宣言」を策定していきます。



デジタル・シティズンシップって何だろう

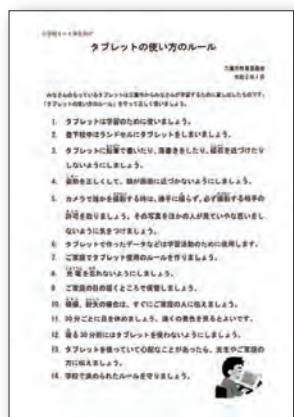
三鷹市では2021年1月に市立小中学校の全児童生徒にiPadが1台ずつ配布されました。配布から2年が経過し、現在は「タブレットをどのように活用していくか」「どうすればタブレットのよい使い手になれるのか」、さらに考えを深めていく段階に入ったといえます。今年度は1年をかけて市全体、そして学園で「デジタル・シティズンシップ熟議」に取り組んできました。

タブレットの「約束」



子どもたちはタブレットと一緒に、三鷹市または学校作成の「約束」のプリントを受け取っています。

- *自分と保護者以外の人には使わせない
- *アカウントやパスワードを人に教えない
- *個人情報を書き込まない
- *長時間使うときは目を休める
- *写真を撮るときは相手に断る
- など、最低限のルールが書かれています。



GIGAスクールの「今」——学校ではこんなふうにタブレットが使われています

インターネットを使って調べ学習

「図書館の使い方や本での調べ方も覚えてほしい」と、あえてその授業を行う先生もおられます。



英語

デジタル教科書で発音を確認しながら学習。



健康観察・毎日の検温

子どもたちが自分で入力しています。



欠席連絡

タブレットから連絡できるようになりました。

GIGAスクールマスターの仕事

市立小中学校では各校に1人「GIGAスクールマスター」の先生がいらっしゃいます。GIGAスクールマスターは授業でのタブレットの活用方法を考案したり、それをほかの先生方に伝えたり、校内の「固まった」「つながらない」などのトラブルに対応したり、定期的に集まって情報交換したり、活用事例集(写真)を作成したりしています。マスター以外に「GIGAスクール研究開発委員」の先生も各校に1人ずつおられます。また、外部の専門スタッフとしてICT利活用支援員が各校を週に半日ずつのペースで回って、技術的な支援や機器の管理などを行っています。



共同編集機能でグループワーク

スプレッドシートやドキュメント、スライドなどをグループで共同編集し、クラスで共有したり、発表したりしています。



操作がわからない時は教え合います。

「Google Meet」を使ってクラスでオンライン会議

画面共有もできます。学級閉鎖になっても自宅から参加が可能。

音楽

ガレージバンドアプリ「GarageBand」で曲づくり。



eライブラリでドリル学習

eライブラリはオンラインで使える学習支援サービスです。学年別・教科別にドリル学習が行えます。



「Jamboard」をクラスの話し合いに活用



付箋に自分の意見を書いてホワイトボードに貼っていく作業を画面上で行えます。

カメラアプリを使って写真や動画を撮影



体育や部活で自分のフォームを確認することもできます。

デジタルとアナログの使い分け



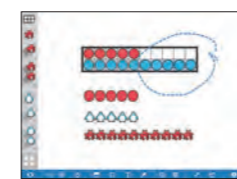
保護者の声「小学校1年生はほとんどタブレットを使ってないみたい。」

小学校低学年では手の感覚を育てることも大切です。紙と鉛筆をあえて使う授業が多くなっています。

「楽だからデジタルにするとか、楽だから紙にするとかではなく、目的に応じて教員や子どもたちが紙かデジタルか選べるようになることが目標です」(高山小GIGAスクールマスター・小林先生)

算数

ナンバーフレームス「Number Frames」で数量の学習。



オンライン授業

自宅で学習している児童・生徒を対象に双方向で進めたり、授業や行事の様子を伝えたりと、個別のニーズに合わせて取り組んでいます。

「Kahoot!」でクイズ形式で楽しく学習。

貝ノ瀬教育長の熱い思い

2022年11月6日に行われた「GIGAスクール@三鷹」講座でのお話から、一部をご紹介します。

- *タブレットは家に持ち帰れるようにしたく、そのためにSIM入りにした。予算はかかったが、市長の判断で実現した。持ち帰りは学習のために必要と考えている。
- *タブレットによって個別最適な学びの実現が期待できる。
- *子どもたちには鉛筆や消しゴムと同じようにタブレットを使えるようになってほしい。
- *家庭による格差が生まれてはならない。そのためには学校で先生方が教えられることが必要。そのために各校にGIGAスクールマスターを設置した。
- *これまでは「人間力・社会力」をつけることが教育のゴールだったが、これからのゴールは「皆のウェルビーイング(幸せ)」。そのために人間力・社会力をつけることを目指していく。未来を担うのは子どもたちであり、そのツールとしてデジタル機器は必須。少子高齢化の中でイノベーションを起こすためにもICTは必要と思う。
- *一方でface to faceの良さや集団生活が子どもに与える良い影響も無視できない。大切にしていきたい。



他自治体では

- *自治体によって端末の種類は異なります。三鷹と同じiPadを使っているのは品川区や世田谷区、調布市など。杉並区や国分寺市はWindows端末、練馬区、武蔵野市はChrome端末を採用しています。
- *基本的に持ち帰りはしないという自治体もあります。
- *端末どのような制限をかけているかもそれぞれです。時間制限を設けていない自治体や、YouTubeが見られる自治体もあるそう(三鷹市では使用できる時間を6時~23時とし、YouTubeは見られない設定になっています)。授業時間内と授業時間外でフィルタリングの条件を変えたり、インターネットの閲覧時間に制限を設けている自治体もあります。

壊れたときは

iPad本体には保険がかかっていますので、基本的には無償修理の対象になります(壊れた経緯にもよります)。ただし修理や交換には1~2週間かかり、その期間の代替機は用意できない状況です。カバー、ケーブル、アダプター等の付属品も市からの貸与ですが保険に入っていないため、自費での修理・交換となります。

学校はこう考えています

「大人がルールを作って規制するのではなく、子どもたちに考えさせる」がデジタル・シティズンシップの基本スタンスです。学校の方針もそれに沿う形でアップデートされてきています。

中学では常に「生徒主体」。自分で考え、能動的に行動する力を大切にしています。ただし、発達段階的にトラブルが多くなる時期でもあり、その点ではしっかり指導を行っています。

危ないものをただ遠ざけるのではなく、正しい使い方を教えていく、それがデジタル・シティズンシップ教育だと考えています。

タブレットの使い方に関しては、「ルールを守っていたかどうか」を問うのではなく、「それは学習なのか」を問うことを心がけています。

タブレットに期待すること

- *プログラミングは世界に通用するスキルなので、学校で体系的に学べるようになること(教員)
- *オンライン授業がもっと充実するとよい(教育長、保護者)
- *校務が省力化できるとよい(教員)
- *不登校の子どもたちの支援(教育長、保護者)
- *通学鞆が軽くなりますように(保護者)
- *いつでもどこでも学習できるようになること(保護者)
- *知的好奇心を刺激してほしい(保護者)
- *個別最適化。一人ひとりの子どもに合わせた学習が可能になること(保護者)

CS委員・3校PTA役員に聞いてみました

家庭でタブレットの使い方のルールを決めていますか?

「決めている」という回答がほとんどで、使ってよい時間や場所を決めているご家庭が大多数でした。その他、「布団の中に持ち込まない」「定期考査前は保護者に預ける」「保護者のアカウントで使う(個人用のタブレット等の場合)」「課金はしない」「フィルターはかける」などがありました。一方で、「家庭所有のタブレットやPCには制限をかけているが、学校のものには保護者は制限をかけられないので野放しになっている」という声もありました。

保護者の声「子どものタブレット、中を保護者が見てもいいの?」

もちろんです。紙のノートと同じです。どんどん見てください。(3校GIGAスクールマスター)

